

(論文)

留学経験者の追跡調査

—再適応を超えて—

赤崎 美砂

キーワード

通時的研究 成人 留学 生活設計 変化としての学習

1. はじめに

世界の留学生数は2000年から2010年の10年間で2.1百万人から4.1百万人へ約2倍に増加している。知識経済の進展に伴い高等教育の需要が伸びることが予想され、留学生教育は産業化が進み各国間の留学生獲得競争が起きている。世界の留学生の半数が向かうのが、政治・経済で活用度の高い英語を母語とする国民が多い国々（アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド）である。（OECD, 2012）

日本語は英語と比較して国際的な流通度が低い言語であることを鑑みると日本が世界10位の留学生数を維持していることは健闘しているといえることができる（OECD, *ibid.*）。しかしながら、留学生獲得の世界規模での競争においては日本は周縁国として位置づけられている（金子、2000）。したがって、日本は留学生からみて他の受け入れ国と比べて特徴的な制度を整備し、留学生獲得に戦略的に取り組む必要がある。そうした戦略のひとつが成人留学生受け入れの促進である。すでに日本に来る留学生の4割は社会人経験をもつといわれており（内藤、2007）、彼らにとって魅力的な留学制度を整備し日本への留学を促すことができれば、政府の留学生30万人計画（文部科学省、2008）をさらに促進できるだろう。

留学の効果について学生支援機構（2005）が行った大規模な調査では、大学院留学経験者は、学問や知識に動機付けられ学位取得の志向性が強く、「留学で得たもの」として88%（複数回答）が「学位や専門知識の取得」を挙げ、「語学力の向上」72%、「海外生活体験」69%「異文化理解・異文化適応能力」66%と続く。その結果として86%が当初の目的・計画を達成したとしている。また、帰国後の現職には69%が満足し、77%が留学が現職に役立っているという結果を示した。また、小柳（2002）が実施したオーストラリアへの留学生の研究では、国家の発展とエリートのカリヤ形成が同じベクトルを示していた留学第1世代と異なり、第2世代にあたる現代の留学は大衆化し留学の目的の個人化・多様化があきらかになった（小柳、2002）。

この他にも留学の成果や意義をめぐる研究はいくつか存在するが、成人を対象を限定し、彼らの留学経験とそれに続く帰国後の生活を追跡する通時的研究は行われておらず、大学の成人留学生へ

あかざき みさ：淑徳大学 国際コミュニケーション学部 教授

の対応を考えるための基礎情報を提供する研究が必要である。このような背景のもとに、日本人成人の留学経験者について、帰国・再適応期以降の生活と留学の関係を成人の学習理論の視点から明らかにする調査を実施した。以下にその結果を報告する。

2. 理論的背景：成人の学習

成人教育学では学習を「経験によってもたらされる思考、価値観、態度の持続的な変化」として捉える（クラントン、1999：5）。このような前提のもとにアメリカの成人教育研究者Jack Mezirowは、成人は既得の準拠枠をもつがゆえに意識や思考が柔軟でなく、成人の学習は思考・価値観・態度の変化によってもたらされるものであるとしてPerspective Transformation理論を提唱した（三輪、1994）。以下にこの理論について説明する。

Mezirowは、個人が経験を解釈するにあたって活用する「準拠枠」（frames of reference）という概念を想定し、成人の学習は、社会生活を営む過程で形成された「準拠枠」が変容することにより経験の意味づけが変わり、個人が行動の選択肢の幅を広げていく過程であるとしている（Mezirow 1990, 2000）。

Perspective Transformationは大きく分けて下記の3つのプロセスをもつ（Taylor 1994b）。

①契機（catalyst）

「混乱を引き起こすようなジレンマ」（Disorienting Dilemma）がきっかけとなってPerspective Transformationの過程が始まる。「ジレンマ」には、親しい人の死や、昇進、目からうろこが落ちるような討議等があたりはまり、Taylor（1994b）はカルチャーショックを「混乱を引き起こすようなジレンマ」として扱っている。

②過程（Process）

Perspective Transformationは「批判的省察」（Critical Reflection）と「理性的談話」（Rational Discourse）を通して進行する。「批判的省察」をとおして学習者が前提や価値観を問いなおし、「準拠枠」の変容をもたらす（Mezirow, 2000）。異文化適応の場合は、「批判的省察」を経て滞在者は新たな世界観を持つにいたる（Taylor, 1994a）。

「理性的談話」（Rational Discourse）では十分な知識を背景とした客観的で理性的かつ直感的な理由付けと討議によって、その場に応じた納得できる判断がもたらされる。権力や勝負志向ではなく、文脈、社会的構造、関係、状況などから自由な討議にするには、話者全員のコンセンサスを得ることが可能な条件を整えることが必要である。大学での討論はこの学習を可能とする理想的条件が制度化されている例のひとつとして挙げられている。（Mezirow, 1991）

常に成り立つとは限らない理性的談話を成り立ちやすくするための一定の条件が想定されている。1）正確で完全な情報、2）自己欺瞞からの解放、3）証拠や議論を客観的に評価する能力、4）他にとりうるパースペクティブに対する柔軟な態度、5）前提やそのもたらす結果を批判的に省察する能力、6）討議参加の機会均等、7）コンセンサスを道理にかなった妥当性の検討結果として認める能力、の7項目である（Mezirow, 1991）。

③結果（outcome）

世界観の変化（Taylor, 1994a, b）に代表される、経験の意味付けの変化及び、準拠枠の変化がPerspective Transformationの結果であり、より包括的かつ吟味され統合された準拠枠にいたる。

3. 先行研究

本論文は日本人成人留学経験者の追跡調査の結果を報告するものである。筆者は日本人成人につ

いて留学中と帰国後の再定着期との2度の調査をすでに実施しており、今回の調査はそれらに続く第3回目にあたる。

第1回の調査は調査協力者がイギリスに留学している期間中に実施され、日本人成人留学生の属性、留学の動機と目的、留学中の適応と学びの過程があきらかになった。最終学歴を修了してから6-10年の28-32歳の調査協力者が4割近くを占め、キャリア定着期に入った社会人学生が多いことが分かった。調査協力者の大多数が留学していた大学では、留学生全体のうち女性で大学院に在籍する学生は4分の1を占めるに過ぎないが、筆者が実施した調査の協力者の半数以上が大学院に在籍する女性であり、留学生一般の傾向とは異なっていた。留学の動機には、現職能力の向上、学位あるいは能力向上による就業機会の確保、キャリア変更、現状打開（同職種の上昇転職、ライフプラン再考の時間確保）の4つの型が見られた。留学の目的は、専門知識・技術・言語・教養・国際感覚・異文化コミュニケーション等の能力の向上と、これらの能力の証明としての学位、日常からの逸脱の機会確保、外国在住経験等であった。これらの留学の目的は、国家の発展と個人のキャリア発達のベクトルが一致していた留学生第1世代とは異なり、国家発展と分離した形で個人の能力の向上を目指す留学第2世代の特徴を示していた。

彼らの大学院での学習・研究については、英語力不足（読解スピード、専門的・社会的語彙力、発信力：口頭、論述）、要求される学習スタイルの違い、これらの能力の向上が期待とは異なりかなり遅いこと等により思うように進んでいないケースが多く見出された。また、教員・現地学生・留学生・現地の人々とのコミュニケーションスタイルや常識の違いに直面して困惑・怒り・驚きを感じていた。このような困難をともなう過程で、新しい学習観と学習習慣、文化相対的な世界観と行動、日本社会の客観視、キャリア観の柔軟化等、知識・行動・認知の変化を経験していた。このような経験は、上述した成人の学習理論 Perspective Transformation の視点からみると、他者との相互作用中の困難な経験を契機とし、事象の解釈や認知の枠組み（現実理解のフィルター）が変化する学びのプロセスとして解釈することができることがわかった。

第2回の調査は調査協力者の帰国後5-8年後、日本の社会や勤労文化への再定着期に実施された。第1回の調査協力者の中から男性3名、女性6名の協力を得て、留学の成果、再適応のプロセス、就業上と私的な生活の中で実感される留学経験の意味を問うインタビューが行われた。留学の成果として、専門知識・英語力・社会的知識・違いへの対応力の向上が認識されていた。これらの能力は留学中に形成され、帰国後の職業上および私的な生活の中での運用によって能力向上の認識が深化していた。留学経験について全員が心理的満足を示したが、留学の資金負担、就業の空白による業務能力停滞等のデメリットも認識されていた。

この調査では、職業上の再定着をふくむキャリア計画が共通するテーマとして語られた。業務を遂行するプロセスや他者の評価を通じて能力向上の実感や職業上の満足が認識される一方、就業状況への不満足感がある場合、それがキャリアプラン形成の継続や複線キャリアの検討につながっていた。総じて他者や環境、社会的文脈との相互作用を通じてキャリアと生活が検討され、変化を続けていることがわかった。結果として、継続的・断続的に形成・変更されるキャリアプランは能力や雇用条件を巡る周囲の他者との相互作用の中での、自他への評価を伴う現実解釈を中心とした、7つのステージをもつ円環サイクルを示している。7つのステージは、現実解釈(ライフステージ参照、予想外の経験、不満) → ビジョン形成 → 目標設定 → 能力育成 → 就職活動(他者評価A) → 能力活用 → 職場(他者評価B)である。キャリアについて男女間の差が顕著であったのは雇用状況とワークライフバランスである。男性は終身雇用あるいは自営業であるのに対し、女性が終身雇用されているのは留学前に専門職にあり復職した調査協力者のみで、帰国後転職

した調査協力者は終身雇用の職に就いていない。男性は留学をキャリアの一部として捉えている人が多いが、女性は出産や不安定な雇用等、職業と個人生活の双方に目を向けざるを得ない状況におかれているケースが多く、ライフプランを柔軟に検討し変更していた。キャリア計画は第2回の調査の共通したテーマであったが、調査協力者全員が学生であった留学中の第1回の調査時とは異なり、帰国後のコンテクストは個人ごとに異なり、上述したキャリア計画以外について、個人ごとに異なるテーマも語られた。

留学の成果認識の過程、キャリア形成過程、個人別の経験について、調査協力者は困難や驚きを契機とし、他者とのコミュニケーションを通じて現実解釈の在り方や解釈の視点を変化させており、帰国後の定着期に行った第2回の調査も留学中と同様に成人の学習過程として捉える事ができた。

上記2回の調査を踏まえて今回実施された第3回の調査は、再定着期を過ぎ職業上・私的生活の変化とともに新たな経験が蓄積される中で、彼らの生活と留学経験がどのように関係し、留学の意味がどのように変化しているのかを問うものである。

4. 方法

第1回と第2回の日本人成人を対象とした調査の協力者のうちの3名（男性2名、女性1名）に今回も協力していただいた。彼らは、社会人経験を積んでからイギリスの大学院に留学し、帰国後10-15年経過しており、現在は正社員あるいは同等の勤務形態で就業している40代から50代の方々である。過去2回の調査に協力して下さったため筆者との間に信頼関係が形成されている。調査にあたっては社会人として多忙な生活を送る調査協力者の都合に合わせて時間と場所の調整を行い、電子メールで調査協力の承諾を得たうえで調査を実施した。

表1 調査協力者

	Aさん	Bさん	Cさん
現在の年齢	50代後半	40代前半	50代前半
性別	女性	男性	男性
婚姻	既婚	既婚	既婚
留学前の勤続年数	19	5	9
留学前後の職業の変化	復職	同業種・同職種に転職	異業種に転職
現在の職位	管理職	管理職	管理職
留学後の勤続年数	11	13	12
留学時の年齢	40代前半	20代後半	30代後半

本研究は、個人が経験をどのように認識しているのかを理解することを目的とする研究である。このような、人が「どのような意味世界に生きているのか」（箕浦、1999：11）を問う質的研究には解釈的アプローチがふさわしく、その1類型であるマイクロエスノグラフィーで全体をデザインした。「人と人、人と状況やモノとの相互作用やそこで伝達される意味」を反映した情報（箕浦、2009：3）を得る方法として、半構造化インタビュー、人口動態質問票、個人年表を用いた。人口動態調査票は、性別、年齢、婚姻状況、職業（業種、職種、雇用形態、肩書き、勤続年数）、留学（期間、時期、課程、専攻、満足度）、等について記入するものである。

調査協力者の許可を得て録音されたインタビューを書き起こしたものをデータとし、「概念の形に置き換える」（箕浦、2009：20）ために、データを意味のある単位ごとに区切り、それぞれのコンテクストを考慮しながらデータに密着したラベルをつけた。その後、データから距離を置き、

概念のみに注目して概念同士を比較し抽象度を上げながらいくつかの概念カテゴリーを作り、さらに中核となる概念を中心に副次的なカテゴリーを関係付けるプロセスを経て理論的仮説を生成していった。

5. 結果

インタビューと人口動態調査票、年表を用いて分析した結果、留学経験の後景化、留学の成果観の変化、生活設計課題の変化、変化の継続性があることがわかった。生活課題についてはライフワークの追求、成長と引退の両立というテーマも見出された。

5.1. 留学経験の後景化

留学から10-15年という時間経過とともに、留学とその後の生活の中で形成された能力や留学経験は当事者にとって常に意識されるものではなくなっていた。

Cさんはこれを「あんまり直接には…感じないかな。正直言ってあんまり感じない」と述べている。Bさんは英語力が必要な業務に就いていて英語使用が当たり前になっており、留学前は得意ではなかった英語を留学によって身につけたことを忘れていた。Aさんは、留学が自分にとって有意義な経験であったのにもかかわらず、それを思い出す機会が減っていることを残念に思っている。

そんなに機会がないと思い出すことはもうあんまり多くないような気がします。もったいないことに。それこそ本でも書けるような経験だったかもしれないんですけどね。あの留学が一体何だったんだろうというふうにはまあ思わないですよ。(Aさん)

専門職単線キャリアを退職して留学したAさんの場合、留学は個人的な経験であり、留学した事実や学位が業務上考慮されることはないという事情も関係しているだろう。

しかしながら、経験や能力が消滅したというよりも無意識に活用されているために意識化される機会が減少したと解釈する方が妥当かもしれない。

最初(筆者注:留学前の業務で)、英語はあんまり話さなかったんで、やっぱり英語を話せないと何もできないなっていうのもあって、それも含めて留学しようかなっていうのもあったんで。それが生かせるって言えば生かせるんですけど。…もうちょっと、あまりに日常的になり過ぎてるのと、あと、たぶん英語力は落ちてるんだろうなっていうふうに思ってるんで。(Bさん)

第2回の調査で、業務上活用し他者の評価が高く留学の成果として語られていた英語の運用能力について、Cさんも今回の調査では「それが普通になっちゃったな。…それが仕事の一部なので、今言われて昔はそんな風感じていたんだなって」と述べている。

また、調査のためのインタビューが、業務や私生活の出来事の中で経験や能力を無意識のうちに想起し活用していることが意識化される機会となっており、インタビュー以外にも経験を共有している他者との会話等、意識化を促す機会が他にもあるものと思われる。Bさんは留学中に身についた複数の人を結びつけ成果を引き出す力を業務の中で活用していることに、インタビュー中に気付いたことを下記のように述べている。

5

気付いてみると仕事の中でも今、海外とかいろいろやってる中ではそこをコネクションさせるっていうようなことを結構やってるな、なんて今、思って。こうやってインタビュー受けてると、あ、そういえばそうやってるななんて今思ったんで。

Aさんも普段は忘れていた留学経験と業務の関係をインタビュー中に再認識したという。さらに、業務関係の雑誌等での掲載など、留学の成果を執筆・発表する機会が他にもあれば、各自の留学の意味について考えるチャンスになるだろうというのが、現在の多忙な生活と、近年の業務上の短期的成果が求められる傾向により、そのような機会は減っているという。

それについて語る機会というのがあまりないんですよ。私的なものとして、…お休みをもらって行ったということなので。…ある年代の、同じぐらいの年代の方が文章を持ち寄って、自分でお金払って冊子を作っていた。そこに誘われて（筆者注：留学先での）生活を文章にして、そして読んでいただいたということはあるんですけども、それ以外に報告書というのも…、発表というのもないですし、なので、あんまりね、語る機会とかがないんですよ。これからもないと思うんですけどね。なので、それをことさらに話題にしたり、書いたりすることなく、思い出すことも少なくはなってきました。…そういう機会（筆者注：文章化）があると、そうですね、より何とというか、その留学の経験を今の自分に引きつけて考えることができるんじゃないのかなって思うんですね。…それがまた新しい問題意識につながっていくと思うんですけどもね。（Aさん）

省察する機会の減少は留学の記憶や留学の成果の認識の希薄化を導くのみならず、Aさんの発言の最後の部分にあるように、当事者の生活設計の熟慮の機会も少なくさせている可能性も考えられる。

5.2. 留学の成果観の変化

留学の成果に対する認識も帰国後の再適応期と、10-15年が経過した現在では変化していることもわかった。今回の追跡調査を通じて、①業務内容や職位の変化に伴って以前と異なる留学の成果に焦点が移っていくこと、②留学経験を想起することそのものが日常生活に埋め込まれて意識化されにくいこと、また③留学の成果を能力という形で捉える事の問題性があきらかになった。

留学の成果観の焦点の変化についてBさんは、昇進により業務の範囲と職務上の権限が拡大し、対応する国や個人別に柔軟に対応できる能力が発揮できていることを下記のように述べている。

どっちかという、そうですね、ここ数年でさらに。前は付き合ってた国が限られてたっていう部分もあったんですけど。さらに今度プロジェクトになったんで、国ごとに半年ぐらいつつどんどん変わっていく中でその国と付き合うっていうことが多くなってきたので、そういった考えが強くなってきたかもしれないです、確かに。

6

また、彼自身が「コーディネーター的」と呼ぶ複数の人を結びつけ成果を引き出す力についても留学の成果として以前よりも強く認識するようになっていた。

そういう柔軟なところでまとめられるっていうか、いろんな意見を聞きながら最後その落としどころをつけていくっていうところは強みかもしれないなと思ってます。…（筆者注：留学中は）小グループでの授業が多かったんで。そのときには役割じゃないんですけども、この人はスピーカーで率先して

いろんな話をしていく人だな、っていう人とか、…そういう役割分担が結構ささっと決まっていくなですね、ある程度やっていくと。そうすると、そこで自分がどういう役割をしなきゃいけないかなってところがだんだんと、ぱぱっと分かってくるので、っていう、そういうトレーニングじゃないですけども、何とか留学時代にやっていたところもあったんで、それで、じゃあ彼はこれやるから自分はこれだな、とか、そういうロールがぱぱっと決められるかな、っていうところは昔の経験から分かるかなと思います。…そうですね。コーディネーター的な役割、いろんな人をつなげる役割かなってというのが自分の役割かなって思っています。(Bさん)

Aさんの場合、管理職としての業務に携わるようになり、業務上のグローバル化対応策の立案や人員の海外派遣の助言等に海外在留の実態の知識が役立っているという。ただ、それは留学経験を参照していることを特別に意識しない形で起こっている。

留学してたからかなとかっていうところは、まあ正直そういうふうにはっきりと意識はしなくても、何となく思い出してるということはあるよな。自分の留学期間を意識せずに。留学ってあいうもんだったとか。ああ、あれぐらいのお金がかかるもんだったとかっていうふうには、意識しないて思い出して比較してるということはあるように思いますけど。(Aさん)

また、留学の成果の捉え方も検討が必要なのがあった。留学の成果を個別の、特定の行動ができるという意味で可視化された「能力」として捉えることは当事者の実感にそぐわず、自己のありかた、価値観といった生きることに全体に関わる影響として捉えた方が当事者の解釈に近いケースがあった。CさんとAさんはこれを以下のように述べている。

たぶん培ったとか経験したっていうことではなくて、培って経験したっていう言い方もできるんですけど、むしろ、最初の留学は20代の後半で、UKに行ったのが30後半ぐらいで、それなりに若かったというか、変な言い方ですけど、自分のものの感じ方とか見方みたいなことにひょっとしたらそういう経験が影響したのかなって思うことはありますけど、それは極めてハイレベルというか抽象的とか価値観みたいな、…もっと生きるっていうことに対する価値観のある種の部分が留学っていうことの影響を受けているんだと思うことはあります。(Cさん)

仕事以外のものを経験し、人とのつきあいとか、いろいろな人と接して、物の考え方とかが広がったというふうには(筆者注：2回目の調査で)お伝えしたと、ような気もするんですけど、その後もそういったことはあるかなあというふうには思います。…やっぱりその留学の経験が仕事に、まあ抽象的な意味では幅ができたとか、それがもとになって見えてくることがあったとか、見えてきたことがあるとか、そういうふうにつながっているのかなあというふうには思いますよな。(Aさん)

7

Cさんのいう「価値観のある種の部分」にはステレオタイプからの脱却(文化相対的態度)も含まれている。外資系企業に勤務するCさんは国籍ステレオタイプにとらわれず、海外の同僚と個人同士としてコミュニケーションしているが、日本国内の同僚や友人には「○○人だから△△だ」といった国籍ステレオタイプをベースにした発言をする人も少なくない。Cさんはそれに違和感を感じ、同僚がその兆候を見せた場合はコミュニケーションを避けるようにしており、勤続10年近く経過してもこの国籍ステレオタイプに対する違和感は消えない。

帰国後の再定着期に行われた第2回の調査では、Cさん以外にも多くの調査協力者が自らのステレオタイプにとらわれない「異なる他者とのありかた」と周囲の人々の異なる他者に対する認識・行動の違いに困難を感じていた。帰国後10年以上を経てもこの課題が存在するという事は、留学の影響のある程度の長さを示していると解釈できるだろう。

さらに留学の成果は、意識化が起こる時点や状況によって変化し続けるものようである。Aさんはこれを「今までの生活とは違う生活をする事で感じる部分とかもあつたかなあつていうことで、そのときそのときで振り返ってみた、その価値とか意義とかという感じ方というのは変わるかもしれないんですけどね。」と表現している。

5.3. 生活設計課題の変化

第2回の調査では帰国後の復職あるいは再就職の過程での生活設計の再構築・再適応が主な課題であったが、今回の調査では生活設計上の焦点が人生後半の展望へ変化していた。年齢や勤務形態により異なるが、インタビューでは定年までの職業上の選択肢や、定年後も続けるライフワークが語られた。

Aさんの現在の生活は、定年までのキャリアと博士課程の研究が二つの柱である。前述のように彼女は定年までの雇用が約束されている専門職で、第2回の調査以降に管理職に昇進し、私生活に充てることのできる時間の制約が強まっている。それにも拘わらず定年後も続けることのできるライフワークの準備のために現職を続けながら博士課程に在籍し研究を続ける見通しである。

Bさんにとっては、予想される出向への対応が大きな課題である。彼は建前上終身雇用の民間企業に勤務し順調に昇進したが、勤務している企業では定年前に大部分の社員が関係企業へ出向し、出向者と非出向者との間で給与や退職金に大きな差ができる。Bさんは残留・出向・転職という3つの可能性について検討し始めたところである。

Cさんの場合は、企業勤務と研究者のダブルキャリアを確立・維持することがテーマである。彼も建前上終身雇用の企業に勤務しているが、リストラの可能性も充分にあるため、リストラ対象にならない程度に業務上の成果を出すように努めている。

ライフワークについては後述するが、定年までの生活設計については、これに深くかかわる待遇・雇用形態が個人の能力と意思だけでなく景気や企業体質といった外部環境の動きの影響を受けて不確実性が高く、これが後述する生活設計変化の継続性に影響を与えている可能性がある。

また、生活設計の焦点の変化に加え、職業上のキャリアと個人生活の比重の変化があつたこともわかつた。AさんとBさんのふたりの男性調査協力者は2回目の調査と今回の調査の間に結婚し、ふたりとも結婚がこの期間での「最大の変化」や「最大の出来事」であつたと表現している。結婚には偶然性が伴うとしても、最大の変化・出来事という表現には偶然性とは別にふたつの解釈の可能性もある。ひとつめは、定年を視野にいれたキャリア後期における人生の見通しの中で、収入あるいは達成感を得る仕事面と個人的な生活面のバランスが変わってきた可能性である。以前は仕事面に大きな比重があつたが、キャリア後期に入って定年が現実的に視野に入ってくるにつれ徐々に生活面の比重が増し、結婚による生活面の同行者の存在に意味が見出されている可能性である。もうひとつは、結婚は留学前から重要視されていたが、帰国後の方が時間とエネルギーに余裕が出た可能性である。留学前後（留学準備、留学中、帰国後の就職活動、再定着）の数年間においては、伴侶に出会う機会と心理的エネルギーが限られていたという解釈もできるだろう。

5.4. 変化の継続性

上記の生活設計課題の変化は、留学から10年-15年の時間経過、現在の生活における対人関係・雇用制度等外部の制約、それらの環境下での調査協力者のライフステージの進展（昇進、職業上の役割の変化、定年までの年数等）によって促されていると考えられる。また、社会の質的变化と変化の速さ、不確実性の高まりにより、彼らの生活設計の変化には継続性と不確実性が見出された。

収入確保のために働くCさんは定年まで勤め上げる計画であるが、彼の勤務先も終身雇用制とはいえ外資系企業で転職による人員の入れ替えがかなりあり、定年まで勤務する同僚は多くない。主体的な転職とは別にリストラされた同僚もあり、Cさんは定年までの雇用を確保するため適切な勤務評定を維持することを念頭において働いている。

Bさんは留学後に転職したが職種は留学前のもと同じであり、現在の勤務先でも特定分野のスペシャリストとして業務の範囲と権限が拡大し、順調に昇進した。勤務している企業は建前上終身雇用制だが、定年前に大部分の社員が関係企業へ出向し、出向者と非出向者との間で給与や退職金に大きな差ができる。Bさんは残留・出向・転職という3つの可能性を10年後の自分のありかたのビジョンとともに検討しているが、彼自身が選択できるのは転職するかどうかという点のみであり、このまま現在の企業で勤務を続けた場合、出向か否かの決定権は企業側にあり、彼はこの状況を「合法的リストラ」と呼んでいる。勤務先は製造業で、従来なら日本の基幹産業として典型的な終身雇用制を堅持し、出向するにしても好条件の出向先が多数あった。しかしながら、海外企業とのM&A、経営者の変化による企業体質の変容、中途採用社員の増加による人員の流動性の当然視の形成、景気後退による出向先の減少と出向条件の悪化等、外的条件の変化が社員個人の対応範囲を狭めているのと同時に全体的に終身雇用制が弱体化し、不確実性が高まっている状況である。留学せず日本企業に継続勤務しリストラの心配がない学生時代の友人たちは、Bさんの状況を理解しがたいようだと言っており、外的環境が生活設計に与える影響を示唆している。

一方、生活設計の継続的变化には、外的状況に規定される部分だけでなく個人の留学経験と不可分な部分があることもわかった。留学の動機や留学中の他者と共有した体験、留学とその後の時間経過の中で継続して形成された能力や世界観・価値観を土台として生活設計の次のステップが展開している。

キャリア展望に組み込みこんだスキルアップの機会として留学したBさんは、今後も10年を1サイクルとしたステップアップが必要だとしており、留学と現在の生活設計がつながっている。Cさんが留学先で偶然新しいキャリアの方向を見出し、帰国後ダブルキャリアを形成していることは留学なくしてはあり得ないプロセスである。また、留学をキャリア展望に直接組み込んでいたわけではなく、自分の興味を満たす学びの機会、長期休暇のようなものとしたAさんの以下の発言は、現職を続けながら博士課程への進学を決意するに当たっては、留学を実行した事実が決断を促している可能性を示唆している。

やっぱり〇〇大(1)に、ちょっと仕事ではないんですけど、に行って、勉強しているのも、△△大(2)で…大学院で勉強したということがあって、それがあのかなっていうか、それが助けとなっているのかなって感じがしますよね。直接これを学んだから、今これがこの〇〇大の勉強に生きてるといふ具体的なものはないとは言いきれませんが、あんまり意識してない。ただそういう何か経験があって、そしてその上に今度はこれっていう形かなっていう。流れが、かなあっていうふうに思いますよね。…自分にとって身近なので、いつでも始めようと思ったときに、また始めようという気持ちになって、行動に起こせるというか。…自分がもし(筆者注:留学に)行かなかったら、そのとき、

9

もっと何かこう躊躇していたとか、もっと大変な決断になってたとか、思い付かなかったかもしれないし、無理かになって思ってたかもしれない。(筆者注(1)(2)：〇〇大は現在在籍する日本の大学院、△△大は留学時の大学院)

生活設計だけではなく、前述のように留学の成果の認識も変化しており、3名の調査協力者のいずれの場合も、留学時の経験の現在の生活への継続的な影響が示唆されている。この点について別の言い方をすると、経験から学ぶことが常態化していることが生活設計の変化を続けさせているということもできるだろう。学びは思考や行動の変化であるから、留学を通じて学び続けた経験が帰国後の継続的な学び志向につながっている可能性がある。しかしながら、これはいわゆる学歴ディバイド、学校での成績が良かったあるいは学校や学習に充実感を感じていた個人が成人後も学び続ける傾向、と捉えることもでき、今後の検討が必要である。

5.5. ライフワークの追求

AさんとBさんは現在の職業上のキャリアとは別にライフワークについて語った。ただし、ライフワークのありかたは各自異なる。Aさんは、現職の延長線上にある研究に基づく実践という形のライフワーク、つまり単線型のライフワークを考えている。一方、Cさんは現職とは異なるもうひとつのキャリアを同時進行させる複線型キャリアを形成をしている。

Aさんは、専門職の仕事を続けつつ2年前から博士課程を開始し、退職・博士課程修了後はその研究に関わる実践をライフワークとしたいと述べていた。彼女にとってライフワークは趣味の範囲にとどまるものではなく、専門職の経験、留学時の修士課程と現在履修中の博士課程で得た知識を総合的に活用し何らかの形で社会に貢献できるもので、その結果充実感を得ることができるものとしている。職業上の能力形成や知識の蓄積にとどまらず、知識の創出をともなう研究を実践に活かす計画で、社会貢献による充実感・達成感を求めている。

ライフワークを語る時、Aさんは繰り返し「継続」について述べていた。継続には、過去に蓄積された能力の延長線上という意味と、次のステップに進む際の心理的バリアの低さという意味があるようだ。

まあライフワークですよねっていうふうには思ったんです。ただそれを取って何をしようっていう目的はなくて。このまま何か続けていけるものがあるとしたら何かかと考えて、仕事とか何とかも一切入れてとか、仕事はもう定年があるので難しいなと思って、勉強だったら自分で続けていけるものかなと思って始めたんですね。…やっぱりそれは、自分の今までやってきたことなので、何て言うんだろう。やっぱり趣味とは違ってライフワークとなると、自分がやったと思えるものとかをやりたくなるんじゃないんですかね。ほかに何かあるかしら。そうですね。やっぱり自分が少しでも習熟してるっていうふうには思いますかね。(Aさん)

10

Aさんの語りは、事前の経験・知識をベースとした次のステップの形成という意味で、上記の生活設計の変化と同様に継続的变化の傾向を示しており、経験についての省察と他者とのかわりの継続が変容を生み出す過程をみせる、成人の学習Perspective Transformationの軌跡を見せているということができるだろう。

一方、Cさんにとって「仕事」は2つある。キャリアの中心となるのは在野の研究者として研究を続けることで、企業勤務はそれを経済的に支えるために必要な仕事として捉えられていた。30

代後半に2度目の修士留学をして優秀な成績を収め研究者の道を模索し始めたCさんは、帰国直後は国内で博士課程に在籍したが、40歳を過ぎていた自らの年齢と国内での研究職で食べていけるようになるまで長い時間を考え併せ、職業としてではなく在野で研究を続ける決意をした。研究は達成感を得ることができる「面白い仕事」であり、企業勤務はそれを経済的に支える「必要な仕事」だという。

Cさんは企業で働きながら研究を続け、昨年、日本語で書いた論文が国内の査読つき学術雑誌に掲載が決まった。これまで研究成果を英語で海外の学術雑誌に発表したことはあったが、日本語の学術雑誌に論文を発表したのは今回が初めてで、国内の研究者との相互評価を伴う学術的交流ができるようになったことに意味があるという。また、研究テーマの見出し方にも満足感をもっている。個人的な興味ではなく、他者が看過しそうな事象について、企業に勤務する中で見出した違和感に基づいてテーマ化したものが研究として成立し、完成時に体調を崩すほど時間や体力の調整が難しかったが、論文として成果を出せた事に達成感を感じている。Cさんの周囲にはダブルキャリア意識をもつ人々が存在し、彼にとってダブルキャリアは特異なことではなく、今後もこの複線キャリアを続けていく計画である。Cさんもまた、経験について省察を続け、他者との関わりを通じて事象の捉え方を変化させており、成人の学習理論Perspective Transformationの視点で理解できるものであった。

5.6. 成長と引退の両立

上記のようにAさん、Cさんはライフワークの追求という形で成長を志向するが、Bさんもライフワークとは異なる形であるが成長志向である。彼は留学前から10年を1サイクルとした上昇的变化の必要を認識し、携わっていた職種に必要な能力向上の機会として留学した。留学前と同じ職種に就いている現職では、留学後10年経ち、業務の範囲が広がり権限も移譲され昇進し、留学の動機であったキャリア上のステップアップが実現している。今回のインタビューで今後も10年を1サイクルとしたステップアップが必要だとしているBさんに対し、筆者がその理由を問うと、以下のような答えが返ってきて、彼が生きていくうえで成長の継続を重視していることがわかった。

ずっと同じことしてちゃいけないっていう。…社内でも社外でも、社内の仕事であってもずっと同じ仕事してもつまらないっていうか、やっぱり別なっていうかちょっとずつ違う仕事をしていった方が、より幅が広がるかなっていうふうには思っているの。なので居場所、ここにずっといたっていうのは、っていうかいやいけないのかなと思ってますね。ちょっと違う仕事をやっぱりしておかないと、自分がルーティーンになっちゃって成長しないのかなっていうふうに思ってるんで、常にちょっとずつ違う仕事していきたいなと思ってます。…結局、成長しないと給与もきつと変わらないじゃないけど伸びないし、成長していかないとやっぱりつまらないから、人生的には。(Bさん)

一方、勤務する企業の終身雇用制度は建前上のもので、出向や転職が現実的な選択肢として認識されるようになり、複数の企業で積み重ねてきたスペシャリストとしての能力を活用できるよう、上記の10年をひとつのサイクルとしたビジョンのモチベーションとあわせて、Bさんは定年前後のキャリアについて慎重に検討をしている。

考察

今回の調査は成人日本人について留学後10年から15年を経過した時点での留学と調査協力者の生活との関係について当事者の認識を確認するものであった。留学中の第1回、帰国後の再定着期に行われた第2回に続く、通算3回目の今回の調査では、留学経験の後景化、留学の成果観の変化、生活設計上の課題の変化、成果観と生活設計の変化の継続性、ライフワークの形成、成長と引退のバランスといったテーマが確認された。留学からの時間経過と留学によって培われた能力の活用の日常化による無意識化、留学を振り返る契機の減少によって留学経験が後景化している一方、留学経験はなお現在の生活と将来設計に影響を与えていた。職域・肩書き等の変化にともなって活用される能力が変化し、さらに留学経験の参照の日常化による無意識化により留学の成果の認識のされ方が変化している。生活設計の課題も第2回調査時の帰国後の職業や労働慣行への再適応とから、定年への道筋やライフワークへ移行、あるいはキャリアと私生活のバランスの変化としてあらわれていた。ライフワークは達成感・充実感をともなう、趣味以上の存在である。留学の成果観や生活設計課題は3回の調査を通して変化が継続している。これは雇用・景気等の外的環境と個人のライフステージの進展が関わっている可能性もあるが、同時に、留学動機・経験の他者との共有・成果としての能力や価値観といった留学経験が背景となり、省察と他者との関わりにより変化がもたらされていると解釈することもできるだろう。

成人学生については就業等の社会的経験に基づいて学習動機が形成されるため、伝統的年齢の学生と比較して進学の動機や目的が明確だといわれている。今回の調査で事前の経験に基づく動機によって支えられた留学中の学習経験は、留学後も活用や省察の機会を契機として継続的に個人の職業上および個人的な生活とその設計に影響することが示唆され、3名の調査協力者はいずれも成長志向があり、10年計画やライフワークという形で生活の充実に主体的に取り組んでいる事実は、経験から建設的变化を生み出す成人の学びとして捉えることができるだろう。

このような成人後も学び続けることに意味を見出し、意識的に制度を活用するなどして学び続けている調査協力者のありかたを認識しておくことは、成人留学生を迎える大学が対応を検討する際に役立つはずである。留学生が職業上の能力向上を目的とする場合は、知識の蓄積に加え、高度な言語能力、対人関係能力、人的ネットワーク等を構築できるようカリキュラム整備を進める必要があるだろう。また、留学が研究者や研究に基づく実践者といったライフワークとの出会いの場となる可能性を考慮すると、修士課程での研究法や研究倫理の教授、研究者の人的ネットワークへの紹介といった機会の提供が必要になるだろう。

ここで課題となるのは、時間経過とともに認識される留学の成果の焦点が変化することである。何かができるという形で説明される個別の能力（コンピテンス）は就職活動等で注目され、その活用がキャリアを支えることにメリットがある。しかしながら、時間経過とともに留学の成果は世界観や価値観といったものに焦点のバランスが変化するようである。これらは省察の機会がなければなかなか意識するものではないうえ、近年の短期的数字上の成果を求める社会的状況は、これらを省察する機会や心理的余裕を減らしている。世界観や価値観といった、物理的利益や実務上数値化しにくく可視化が難しい留学の成果については、大学が留学生募集にあたって魅力として言語化することが難しいだろう。成人留学生をターゲットとしてリクルートするのであればこの点を言語化や数値化とともに他の手段で訴えていくことを大学が認識しておく必要があるだろう。言い古されたことであるが、多様で変化する学生のニーズを的確に捉え対応していく柔軟性が大学にとって必要であることはこの調査でもあきらかになった。

また、調査インタビューが日常生活の中で留学経験や能力を無意識のうちに想起し活用している

ことに気づく機会となっていた。英語の検定やタイピングのワード数とは異なり、数量化できない能力や経験に基づいた行動は、それを意識化する機会がなければ「なかったこと」になりやすく、また同じような事象に対して個人ごとに意味づけが異なり、状況や必要の変化により意味づけが変化する。留学の成果については継続的な質的研究が必要な分野であることを再認識した。

引用文献

- 内藤均 (2007) 「これからの留学生就職支援のあり方」『留学交流』日本学生支援機構19 (2)
- 金子元久 (2000) 「周辺の大学とその未来—高等教育のグローバル化」『教育社会学』(66) 41-56.
- 小柳志津 (2002) 「留学大衆化のなかの在豪日本人留学生：留学動機と成果を中心に」『留学生教育』(7) 27-38
- 日本学生支援機構 (2005) 『平成16年度「海外留学経験者の追跡調査」報告書～海外留学に関するアンケート』独立
行政法人日本学生支援機構留学情報センター
- 箕浦康子編 (1999) 『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房
- 箕浦康子編 (2009) 『フィールドワークの技法と実際II—実践・解釈編』ミネルヴァ書房
- 三輪健二 (1994) 「成人期の生涯学習」香川正弘・宮坂広作 (編著) 『生涯学習の創造』ミネルヴァ書房
- 文部科学省高等教育局学生支援課留学生交流室 (2008) 『「留学生30万人計画」骨子の策定について』文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm アクセス日：2009/01/05
- MEZIROW Jack (1990) *Fostering Critical Reflection in Adulthood: A Guide to Transformative and Emancipatory Learning*. San Francisco: Jossey-Bass.
- MEZIROW Jack (1991) *Transformative Dimensions in Adult Learning*. San Francisco: Jossey-Bass. *Adult Learning : a Reader*. London: Kogan Page. pp.2-13.
- MEZIROW Jack and Associates (2000) *Learning as transformation : critical perspectives on a theory in progress*. San Francisco: Jossey-Bass.
- OECD (2012) *OECD Education at a Glance*. http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/index01.htm (文部科学省 HP)
- TAYLOR Edward (1994a) *A Learning Model For Becoming Interculturally Competent*. *International Journal of Intercultural Relations*, 18 (3) 389-408.
- TAYLOR Edward (1994b) *Intercultural Competency: A Transformative Learning Process*. *Adult Education Quarterly*, 44 (3) 154-174.
- TAYLOR Edward (2000) *Analysing Research on Transformative Learning Theory*. In: J. Mezirow and Associates. *Learning as Transformation: critical perspectives in a theory in progress*. San Francisco: Jossey-Bass. pp. 285-328.

(受理 平成28年9月20日)